

氏 名 和田 薫 (わだ かおる)

職 名 教育学科 准教授

最終学歴 聖和女子大学大学院教育学研究家幼児教育専攻

学 位 修士

論文題目：「経験の教育学的意味～デューイの教育学を中心に～」



主な職歴 1976年 聖和女子大学附属北聖和幼稚園（聖和大学助手兼務）を経て

1978年 聖和女子大学児童相談研究所 研究員

1978年 聖和大学専任講師 教育学部（児童相談研究所兼務）

1990年 聖和大学児童相談研究所所長代行（兼務 2002年3月まで）

1992年 聖和大学助教授 教育学部

2009年 関西学院大学准教授 教育学部（合併による名称変更 現在に至る）

その他 1999年 兵庫県社会福祉法人日本保育協会 子育て協力委員（2003年3月まで）

2004年 兵庫県教育委員会 特別な支援のいる児童生徒の巡回相談員（2008年3月まで）

2006年 三田市教育委員会 特別支援教育相談員（現在に至る）

2007年 こばと聴覚特別支援学校評議員（現在に至る）

2009年 尼崎市保育課障害児保育判定指導員（現在に至る）

2011年 関西学院大学総合支援センター副長（現在に至る）

2013年 聖和乳幼児保育センター理事（現在に至る）

専門分野 特別支援教育、障害児保育、幼児教育学

主な著書・論文等

- 1 「発達遅滞児の遊具を中心とした遊びの指導」（単著）（関西教育学会紀要第14号1990）
- 2 「統合保育を支えるもの～発達障害児を持つ親への援助についての一考察」（単著）（聖和大学論集教育学系第31号A 2001）
- 3 「実践事例に基づく障害児保育」（共著）（保育出版社 2007）
- 4 「キーワードで学ぶ障害児保育入門」（共著）（保育出版社 2007）
- 5 「子どものこころとからだを育てる『健康』」（共著）（保育出版社 2008）
- 6 「発達障害の子どもを持つ親への就学支援についての一考察 ～通常クラスへ就学した広汎性発達障害児の実践事例を通して～」（単著）（教育学研究 創刊号 関西学院大学教育学会 2009）
- 7 「巡回相談から見た介助保育者に付いての一考察」（単著）（教育学研究 第4号 関西学院大学教育学会 2012）
- 8 「保育実践にいかす障がい児の理解と支援」（共著）（嵯峨野書院 2014）
- 9 「保育所における障がい児の保育支援～巡回相談時の保育者の質問を中心に～」（単著）（教育学研究 第8号 関西学院大学教育学会 2015）

理論と実践の狭間で

～子ども達が教えてくれたこと～

和 田 薫

40年を過ぎた私の教員生活は振り返ると、その礎となっているのは、聖和キャンパスでの学びと多くの出会いです。日本で初めてできた幼児教育専門の大学院、その2期生として、学長の山川道子先生をはじめ、ポウルビィ研究の黒田実朗先生、フレーベル研究の荘司雅子先生など多くの先生方のもとに、「ひとり一人の子ども」を大切に育んでいく乳幼児教育の大切さを教えていただきました。環境が子どもにどれ程影響するか、子どもに携わる保育者の質の高さがどれほど求められるのか、文字通り「乳幼児教育」の大切さを学びました。

中でも、修士論文のご指導いただいた故荘司雅子先生は、講義の中で幾度となく幼児期の意義を熱心に語られました。講義の中でいつも語られた、「子どもに生きる」と、「あなた方の使命は、幼児教育において理論と実践を結びつけていくこと」これら二つが、私の心に深く根を張りました。それ以後教員生活を送る拠り所であり、今もなお考え続けている課題となっています。

「実践と理論を繋いでいくぞ」と意気揚々と始まった、新任の幼稚園教諭時代は、惨憺たるものでこの言葉は、ひたすら空回りをしていました。現場の厳しさ、保育実践の難しさを身にしみて感じました。きっと子どもを見ていても、子どもが見えていなかったのだと思います。それでも頑張って子どもたちの姿から、もう一度幼児教育を問い直してみようと3年目に向けて意欲を持っていました。

ところが1975年に児童相談研究所が作られ、その翌年に研究員としての勤務を告げられ、幼稚園教諭の時代はわずか2年で、全く別の世界に飛び込むこととなります。そしてこれが、奇しくも私のライフワークになりました。

1970年代以降は、障害を持つ子どもたちに、手がさしのべられ、急速に展開していく時代でした。73年に中央児童福祉審議会の中間答申で行政による統合保育の必要性が提起され、翌年に「障害児保育事業実施要綱」が定められ事実上の統合保育が幼稚園でも保育所でも始まった時期でした。79年には、早期発見・早期療育のための総合的な体制が作られていきます。このような全国的な流れの中で、本学に

おいて障害を持つ子どもへの支援も含め、文字どおり、すべての子どもたちへの幼児教育が始まりました。当時は発達障害の言葉も、ICF（国際生活機能分類）の考え方もなかった時代です。

研究員になった私は、定型発達の子どもの近くに近づけようと苦戦し、問題行動が理解できず、全く仕事にアイデンティティが持てない時期が続きました。

子ども達は、そのような私に、様々な問題行動を通して、その裏側には大きな意味があること「子どもと生きる」のではなく「子どもに生きる」事の意味を教え続けてくれていたと、今ふりかえります。

「あのね、触るとたたいてしまうのは、その子が嫌いじゃなくて、いたく感じるんだよ」（感覚過敏）

「片付けの時間に飛び出すのは、狡いんじゃないかって何をしているか分からないんだ。分かるように絵で示してよ、それからいつ終わるのかも」（見通し）

「決まった時間に部屋を飛び出すのはね、大好きな清掃車が来るからだよ。行ってしまうと帰ってくるよ。知っていた」（固執、興味の偏り）

もし子どもたちが話せたらきっとこんなことを伝えてくれたと思います。子どもの示す問題行動が実は問題行動でなく、困っていることを伝えたいけれど、伝え方が上手なくて、大人が理解できていないのです。理解ができれば関わり方も考えられます。それは智慧と知識を持って子どもに学ぶことではないでしょうか。私は、多くの先生方や子どもたちから長い時間を掛けて学びました。

現在、巡回相談や教育相談で、自分自身の持ち味として、大切にしているのは、子どもの行動だけに目を奪われるのではなく、その裏にある認知の仕方や、感覚レベルの問題を探りながら、わかりやすく説明しそこから支援の方法を相談される方と共に考えていく具体的な姿勢です。あまり意識はしていませんでしたが、研究会の後、ある保育者が「自分のしてきたことが言葉として納得できました」と感想を述べてくださった時に、少しは「理論と実践を結ぶ」このメッセージを果たせたのかなと実感し、少し幸せな思いになりました。同時に「子どもに生きる」言葉の重みをあらためて噛みしめました。

ふり返り多くの出会いに感謝しつつ筆をおきます。